

# 平安時代における仮名文学の価値について

## ——日記文学を中心に——

伊藤 守幸

2010年11月8日にワルシャワ大学で開催された「日本文化—その価値観の多様性」と題する国際シンポジウムにおいて、筆者は本稿と同じ題目で研究発表を行った。所与の課題が「日本文化における価値観の多様性」という大きなテーマであったため、平安文学の研究者という立場からどのように具体的論点を提示できるかと考えた結果、仮名日記の誕生の経緯や漢文日記との差異を検証することによって、漢文と仮名文という異質な表現スタイル（あるいは異質な文化）をめぐる当代の価値観の多様性や時代的変遷を確認しようと試みたのである。ただし、シンポジウムの発表時間は限られていたので、口頭発表のために準備した覚書はごく簡略なものであった。本稿は、その覚書に対して全面的に稿を改めている。なお、論述の都合上、一部に既発表論文<sup>1</sup>と論旨の重なる部分があることをお断りしておく。

※

平安時代以来、日本では優れた文学性を有する日記が数多く記されてきた。とりわけ10世紀から14世紀にかけては、文学史的にも注目される日記が輩出しており、それらの時代の文学を語る際には、「日記文学」という項目を立てて、一群の日記を総括的に論じることが一般化している<sup>2</sup>。中でも平安時代の日記に対する評価や関心は高いのだが、この時代には、紀貫之（868年頃～945年頃）や紫式部（生没年未詳）、和泉式部（生没年未詳）といった日本文学史を代表する作家や歌人が、文学的にも史料的にも価値の高い日記を書き残しているため、それらの作品が、1000年余りの時間を超えて常に読者の

<sup>1</sup> 伊藤守幸『「更級日記」概説（I）』（『学習院女子大学紀要』12号、2010年3月）。

<sup>2</sup> 「文学」という用語そのものは近代の産物であり、「日記文学」という用語の一般化も20世紀以降の話である。ただし、用語は新しいものであっても、たとえば平安時代において、仮名日記と物語の近似性や差異性について日記作者たちが自覚的であったことは、残された日記作品の内実から明らかである。「日記文学」という用語の成立事情や定義については、森田兼吉『日記文学の成立と展開』（笠間書院、1996年）が、論点を的確に整理している。



関心を集めて来たのは、ある意味で当然のことと言える。ただし、こうした日本文学史のありようは、世界文学史の観点からはきわめて例外的な事態と言わざるを得ない。なぜ、日本では文学作品として評価される日記が輩出したのか。その経緯を明らかにするために、日本における日記の来歴を簡単に遡ってみよう。それによって、仮名散文という新しい表現様式に対する同時代の評価の変遷を辿り直すこともできるはずである。

日本列島（北海道、南西諸島等を除く）に、中国から学んだ法制度を基盤とする国家体制が確立したのは7世紀後半のことだが、独自の書き言葉を持たない日本語は、それ以前から、文字言語に関しては専ら中国語に依存していたのである。中国の史書に日本関係の簡略な言及が登場するのは、紀元前の事に遡るが<sup>3</sup>、1世紀～3世紀になると、日本使節の名前や貢ぎ物の内容等が、具体的に記録されるようになる<sup>4</sup>。そのように具体的な記録が残されるほどの外交関係が発生した以上、その段階で、外交の当事者間に言語的コミュニケーションが成立していたことは間違いないし、日本からの使節が漢字を目にした可能性も高いだろう。日本列島の住人と漢字の関係は、相当に古い歴史を持つと思われるが、ただし、日本で漢字が常用されるまでには、更に多くの時間を要したのである。鐘江宏之『律令国家と万葉びと』<sup>5</sup>は、発掘調査の進展により、2世紀以降の文字資料の発見例が増えつつある事実を指摘しつつも、6世紀までの発見例が限られていることから、そうした発見例の少なさが、当時の倭国における文字使用の実態を反映しているのではないかと推断している。同書によれば、日本国内で「日常的に文字を使う人々が増えてきた」（31頁）のは7世紀に入ってからであり、当時の遺跡から発見された多くの木簡が、それを裏付けているのである。

さて、奈良時代（710年～784年）ともなると、公文書の類が漢文（文字言語としての中国語）によって記されるのは当然のこととして、『万葉集』（8世紀末）の表記法に端的な形で認められるように、和歌を記述する際にも、漢字の「音」を借用し、漢字を音節文字のように利用することが、盛んに行われていたのである。日本語を書くために画数の多い漢字を利用するのは、きわめて効率の悪い方法だが、9世紀後半に至るまで、それが日本語を書き表す唯一の手段だったのである。しかも更に厄介なことには、『万葉集』は漢字を宛字として借用するだけでなく、しばしば漢語や漢文をそのまま和歌表記のために用いるので、そうした表記を「和歌」として判読することには、場合によっては致命的な困難が伴うことにもなったのである。

<sup>3</sup> 『漢書』（80年頃）地理志、『論衡』（1世紀頃）等。

<sup>4</sup> 『後漢書』（5世紀頃）東夷伝、『魏志倭人伝』（3世紀末）。

<sup>5</sup> 鐘江宏之『律令国家と万葉びと』（小学館、2008年2月）。



文学史上の興味深い事実として、『万葉集』という巨大な歌集の完成後、歌集ではなく漢詩集の編纂が相次いだことが知られているが、こうした文学史の展開と、文字言語として漢字を借用するしかなかった当時の言語状況が、密接に関連することは言うまでもない。『万葉集』を読むとき、読者は、古代の日本列島の各地で、社会階層の壁を超えて多くの人々が盛んに和歌を詠んでいる事実に関心されるが、同時にそれらの和歌を表記するために用いられた膨大な種類の漢字を目にすると、この歌集の編纂や記録に携わった人々が、漢詩文に対する深い教養を身につけていたという事実にも気づかされるのである。そうした当時の貴族層の教養のあり方が、平安時代初期の漢詩文創作の隆盛を導いたのである。漢詩文の贈答に関しては、和歌のような記録・伝達にまつわる困難が存在しない点も、当時の漢詩ブームを後押しする力となったであろう。日本文学史が漢字の借用による厄介な表記法から解放されるには、日本語を表記するための音節文字（＝仮名）の発明を待たなければならず、それには『万葉集』の成立から更に1世紀ほどの時間を必要としたのであった。

本稿では、平安時代における仮名文学の価値を問題にするにあたって、ふたつの文学史的「空白」に着目して、問題提起を試みたいと考えるが、最初の「空白」は、『万葉集』と『古今和歌集』（905年）の間に存在する和歌史的空白である。

『万葉集』は私撰集とはいいながら、現存最古にして最大の歌集であり、その編纂が実質的に国家的事業であったことは想像に難くない。そして、『万葉集』の後に同様の重要性を有する歌集として登場するのが、最初の勅撰和歌集としての『古今和歌集』ということになるが、このふたつの歌集の間には1世紀以上の時間的懸隔が存在するのである。もっともその100余年の間にも和歌は詠み継がれているし、私撰集や私家集が編まれなかったわけでもないから、ここで言う「空白」とは、その時期の和歌史が文字通り空白であったことを意味するものではない。問題は、『万葉集』のような大部にして内容的にも充実した歌集が登場したにもかかわらず、その後なぜ勅撰和歌集の登場がこれほど遅れることになったのかという点である。この奇妙な時間的懸隔は、文学史を表面的に眺め渡すだけでも直ぐに目につくものだが、そうした空白が存在する理由もまた、文学史の展開の中に容易に見出すことができる。

すでに触れたように、『万葉集』の成立後に生じたのは漢詩文創作の隆盛という事態であった。そして、『古今和歌集』の成立に先立って、仮名が発明されているのである。仮名の厳密な誕生の時期は不明だが、9世紀後半の出来事であることは間違いない。『万葉集』の成立後に陸続と歌集が編まれるという事態が生じなかったのは、解読の困難という点も含めて『万葉集』の和歌表記法に根本的な問題があったためであり、その点は、



仮名の誕生後に和歌文学の黄金時代が到来することと表裏の関係にある。仮名の発明は、日本文化史上の最も重要な節目と見なし得る出来事だが、そこに更に律令国家の質的変容といった政治＝文化史的文脈をも重ね読むならば、8世紀から9世紀にかけて、時代が大きな変動のうねりの中にあったことは明らかであり、勅撰和歌集の登場の遅延という事態も、そうした文脈の中で生じた出来事として矛盾なく理解できるのである。

引き続き、日記文学に関わる文学史的空白について検証を進めるが、その前に仮名日記の登場前後の事情について簡単に整理しておきたい。

古代文化に関わる他の多くの事柄と同様に、「日記」という言葉や概念もまた中国文化に由来するが、資料が乏しいこともあって、そうした言葉や概念が日本社会に定着するようになった経緯を具体的に明らかにするのは困難である<sup>6</sup>。ただ、大まかな言い方をすれば、「日記」という言葉や概念が定着する過程は、中国渡来の史書を通じて「歴史」に関する概念が受容される過程とほぼ重なるはずである。現存する最古の歴史書である『古事記』の成立は712年、最古の正史『日本書紀』の成立は720年だが、それらの史書の記述からは、史書編纂のための資料として用いられた『旧辞』や『帝紀』が、5～6世紀頃にはすでに作成されていたことが知られるし、7世紀の初めには聖徳太子と蘇我馬子によって『古事記』に先立つ最古の歴史書が作成されたことも知られている。こうした事実を通じて、日本人の歴史意識の成熟過程を窺うことができるのである。

「歴史」概念の受容をめぐるこうした経緯を、「日記」の受容に敷衍して考えても不都合はあるまい。たとえば、最古の漢詩集である『懷風藻』(751年)は、時代順に作品を配列し、詩人の伝記にも言及するが、最初の正史が完成した後に作成された『懷風藻』が、個人の伝記に関心を向けているのは、ただの偶然ではないだろう。

奈良時代に「日記」の概念が広く受容されていたことは、たとえば『万葉集』の編纂者である大伴家持の家集が「歌日記」的性格を有することや、『万葉集』そのものにも紀行文や日記のような性格を有する一連の歌群が採録されていることから明らかである<sup>7</sup>。ただし、それらの家集や歌群について、「日記」という呼称が用いられることはなかった。平安時代初期の段階までは、「日記」と言えば、専ら「内記日記」、「外記日記」のような中央官庁の記録(公的日記)や男性官人の私的日記等、漢文で記されたものを

<sup>6</sup> 「日記」及び「日記概念」の中国からの移入に関しては、玉井幸助『日記文学概説』(目黒書店、1945年)に詳しい解説がある。ただし、同書の論点が漢文日記に偏っている点については、「日記文学史」の観点から前掲森田論文が疑義を示している。

<sup>7</sup> 仁平道明「『土佐日記』前史―旅の日記の始発」(学燈社『国文学』、2006年7月)は、『万葉集』巻十五の遣新羅使人歌群を「喪失」とそれゆえの「むなしい帰京」のモチーフによる「海の旅の日記」と読む視点を提示し、『土佐日記』への影響を指摘している。



指していたのである。それらの漢文日記の書き手は男性であり、記述の形式としては日録形式が用いられ（暦に書き込まれる場合も多い）、内容的には出来事の記録に主眼が置かれて、記事内容に関する筆者の意見や感想の表出は、きわめて限定的である。

平安時代の漢文日記の中には、後世の写本のみならず著者自筆の原本が今日まで伝えられているものも数多く存在する。そうした継承の仕方からも、漢文日記が史料として重んじられ、大切に伝承されてきたことは明らかなのだが、その一方で、それらの日記は、上述した内容面の特徴から、長い歴史を通じて読者の文学的関心を惹くことはなかったのである<sup>8</sup>。それに対して、「日記」と称しながらも不特定多数の読者を獲得し、日本文学史上に「日記文学」という特異な様式を成り立たしめたのは、仮名で書かれた日記である。

先述したように、漢字の草体を更に簡略化することによって、日本語を表記するための音節文字としての平仮名が発明されたのは、9世紀後半のことである。簡便で効率的な仮名は、それ以後急速に普及することになる。『古今和歌集』の古い写本を見ると、漢文の序文を除いて基本的に全編が仮名で表記されている（漢語等の表記に多少の漢字は用いられるが）。文学史上最初の勅撰和歌集として、和歌の地位を漢詩と同列に位置づけた『古今和歌集』は、公的に権威づけられた最初の仮名文学でもあったのである<sup>9</sup>。

『古今和歌集』には、漢文の序文の他に仮名序も付されているが、歌集の序文が仮名（すなわち日本語）で書かれたのは、これが最初である。そして、この仮名序の筆者こそ、後に最初の仮名日記である『土佐日記』（935年頃）を執筆することになる、紀貫之であった。紀貫之がこの世に生を享けたのは、仮名の発明と同時期であり、彼の生涯は、仮名表現の発達期と完全に重なっている。というよりも、『古今和歌集』を編纂し、その序文を仮名文で記し、更には文芸性に富む仮名日記という新たな様式までも生み出した貫之こそが、仮名表現の偉大な開拓者だったと言う方が正確だろう。

『土佐日記』は、土佐守紀貫之の都への帰任の旅という明確な枠組を有する作品である。ただし、2カ月の旅の記録というコンパクトで堅固な外観とは裏腹に、この日記の内実には、多くの主題的要素を内包する自由で実験的な作品として書き上げられている。『土佐日記』の中に描かれた紀貫之は、場面に応じて様々な姿を見させている。あるとき

<sup>8</sup> 平安時代の仮名日記は、『土佐日記』を例外として、いずれも非常に早い段階で原本が失われているが、その一方で多くの写本が伝存することから、それらの日記が多数の読者を獲得していたことは明らかである。多くの愛読者を持つ仮名日記の原本が、おそらくは読者の多さ故に早い段階で失われたのに対して、限られた読者しか持たない漢文日記の原本が、現在まで無事に伝えられているのは、歴史の皮肉とでも呼ぶしかない事態である。

<sup>9</sup> 最初の勅撰漢詩集である『凌雲集』は、『古今和歌集』に遥かに先立つ814年に成立している。



は土佐守として送別の宴に臨み、道中の無事を祈り、悪天候や海賊の襲来を心配したりする一方、当代一流の歌人としての力量を発揮し、多くの歌を創作したり、和歌や芸術に関する批評家的（あるいは指導者的）発言を繰り返したりもする。更には、任地で亡くした娘のことを追懐する父親としての姿や、周囲の人々の言動に辛辣なまなざしを向ける老人としての姿も印象的に叙述されている。

熟練した作家である貫之は、『土佐日記』の執筆に当たって、自身の人生観や芸術観を自在に開陳する場として、物語以上に束縛の少ない、仮名日記という新たな文芸様式の創出を試みたのではあるまいか。その結果、この日記は、土佐からの船旅を描く紀行文という枠組の中に、当代最良の知識人による諷刺と諧謔の魅力に富む言説を盛り込んだ、斬新な作品として書き上げられたのである。

こうした『土佐日記』の特徴を勘案するとき、男性官人として漢文日記をつける習慣を有する貫之が、事実の記録を中心とする従来の漢文日記とはまったく異質な作品として、この仮名日記を構想したことは明らかであり、老境に入った芸術家（『土佐日記』執筆時の貫之は、60代後半と考えられる）の示す、進取の気象に富む若々しさ、新しい文芸様式の開拓を試みる精神の柔軟さに読者は驚かされるのである。

ところで、仮名日記の歴史の中で『土佐日記』を捉え直すとき、日記文学の原点に位置する『土佐日記』と、他の平安中期の仮名日記との間には、ある決定的な違いが存在する。それは、『土佐日記』が男性によって書かれているという点である。同時にこの日記は、男性の作者が女性の語り手を仮構しているという点でも例外的な作品である。

貫之が女性仮託という方法を用いた理由については、従来も様々な説が示されており、単純な理由によるとは思われないが、男性の書く仮名日記というものに対する違和感（作者にも読者にも共有されるはずの違和感）もまた、その理由のひとつと考えられる。仮名日記という新たな文芸様式を切り開いた『土佐日記』が、単なる表現形式の目新しさにとどまらない、豊かな文学的可能性を開示して見せたにもかかわらず、その後、男性作家の側に同様の試みに挑む者が現れなかったのは（あるいは、そうした作品が現存しないのは）、文学史上の重要な謎と見なされるべき現象であるが、この奇妙な事態も、仮名日記に対する男性作家の抵抗感の大きさを示唆するものと言えそうである。男性たちが漢文で日記をつける習慣を有していたという事実は、少なくとも彼らの仮名日記執筆を後押しする条件とはならなかったのである。

『土佐日記』にはなぜエピソードが存在しないのか。これが、本稿で指摘しておきたいもうひとつの文学史的空白である。近代の話になるが、森鷗外（1862年～1922年）の『キタ・セクスアリス』（1909年）には、主人公の金井が、夏目漱石（1867年～1916年）の『吾輩は猫である』（1905～06年）を読んで「技養を感じた」ことが記されてい



る。金井の思いは鷗外の経験でもあったと思われるし、現に鷗外は、漱石の小説に刺激されたかのように、精力的に小説の創作に打ち込んでいるのである。そんな近代の出来事と比べると、『土佐日記』の登場に際して生じた事態は、まったく対照的である。そもそも『土佐日記』が評価に値しない作品であるのなら話は別だが、この日記は、斬新なスタイルの中に多様なテーマを織り込んだ魅力的作品として仕上げられているわけだから、同時代の男性読者が刺激を受けなかったはずはないのである。しかし、現実の問題として、『土佐日記』に同時代の亜流作品は存在しない。なぜそんな成り行きになったのか、彼らは『土佐日記』に「技養を感じ」なかったのかという問に対する答えは、先の和歌史の空白の場合のように簡単には見つからない。

10世紀に書かれ、現在まで伝存する物語のほとんどが、男性作者の手に成ると考えられることから明らかなように、当時の男性に仮名散文を書きこなす力がなかったとか、仮名作品に興味がなかったという議論は成り立たない。男性作家たちが、仮名散文を駆使しつつ物語の創作に積極的に取り組んでいる時代にあって、『土佐日記』だけが文学史的に孤立している理由を問うとき、逆説的な物言いながら、当時の男性官人が漢文で日記をつける習慣を有していたという事実が、重要な鍵を握っているのではなかろうか。仮名で書くことを前提とし、「漢文物語」という対立概念を持たない仮名物語に対して、「漢文日記」という様式がすでに確立している分野において、仮名で日記を記すという行為に対しては、正統性や規範性の面から強い自己規制の力が働いたと考えられるのである。

日本文学史において、『土佐日記』に続く仮名日記として位置づけられているのは『蜻蛉日記』（975年頃）、作者は藤原道綱母（936年頃～995年頃）である。両作品の間には40年ほどの時間的懸隔が存在するが、女性仮託という大胆な手法を用いつつ仮名日記という新たな様式を切り開いた『土佐日記』に対して、次に登場する仮名日記が女性の手に成る作品であったというのは、ある意味で理に適った話である。もちろん、短期間の旅日記として構成されている『土佐日記』と、20年以上の時間を内包する自叙伝としての『蜻蛉日記』では、内容的類似性はほとんど認められないが、『土佐日記』の切り開いた文学的可能性は、意見や感情の自由な表出を可能にする仮名散文にしても、多くの歌を内包し家集的性格をも併せ持つ仮名日記というスタイルにしても、本来女性たちが待ち望んでいた表現様式と言えるものである。当時の女性読者にとって、『土佐日記』の切り開いた新しい表現スタイルが、如何に好ましいものであったかということは、その後の文学史の展開を見れば歴然としている。

上述のように、『蜻蛉日記』と『土佐日記』の間に内容的な接点はほとんど見当たら



ないが、文学史的に見ても、『蜻蛉日記』の登場は、『土佐日記』の場合とは対照的な事態を引き起こしている。すなわち、追隨する男性作家の現れなかった『土佐日記』の場合とは逆に、『蜻蛉日記』の登場以降、多くの女性作家が日記の筆を執ることになるのである。

道綱母の次世代には、清少納言（生没年未詳）、和泉式部、紫式部、菅原孝標女（1008年～?）といった優れた女性作家、歌人が輩出する。彼女たちの活躍によって、11世紀の日本の仮名文学は、女性に主導される観を呈するのだが、これは、世界史的に見て類例のない出来事である。そして、この稀有な事態を実現した作家たちが、こぞって日記を記しているのである。彼女たちの書き残した、『枕草子』（1000年頃）<sup>10</sup>、『和泉式部日記』（1007年頃）、『紫式部日記』（1010年頃）、『更級日記』（1060年以降）といった作品は、いずれも個性的で興味深い内容を有している。こうした日記作品の充実ぶりを見れば、もともと漢文日記と縁のない女性たちが、仮名日記という新たな表現様式に魅力を感じ、その執筆に真剣に取り組んでいたことが分かる。

とりわけ紫式部の場合、自ら日記を記したばかりでなく、『源氏物語』の創作を通じて、古物語の「そらごと」に対する『蜻蛉日記』の批判<sup>11</sup>に込める姿勢を示しているのである。すなわち、あらゆる先行文芸を統合するようにして構築された『源氏物語』は、仮名日記の美点についても、きちんと押さえた上で書き進められているのである。そんな『源氏物語』の中に、日記の存在が直接的にクローズアップされる場面がある。総合巻の一場面である。

冷泉帝の後宮に出来した絵画ブームは、遂には藤壺院や冷泉帝の御前での絵合の開催にまで至るのだが、その物語絵合の晴れ場で、他の多くの物語を押し退けて、一座の人々に圧倒的な感動をもたらすのが、須磨蟄居時代に光源氏の記した絵日記だったのである。日記が物語と同様の（あるいはそれ以上の）感動を、読む者に与え得ることを明示した場面として、強いインパクトを有する記事であり、その内包する意味については十分に留意する必要がある<sup>12</sup>。

さて、漢文日記と無縁の女性たちの関心が、このように仮名日記へと向けられることには何の不思議もないわけだが、それでは当時の男性たちは、こうした状況をどのよう

<sup>10</sup>『枕草子』のスタイルを、一義的に捉えることは困難である。日記的章段、随想的章段、類聚的章段の集合体というのが実態だが、多分に日記的性格を有することは間違いない。

<sup>11</sup>『蜻蛉日記』の序文参照。

<sup>12</sup>『源氏物語』に登場する光源氏と紫上の日記の意味については、『源氏物語』と日記文学—光源氏と紫上の日記をめぐる考察（菊田茂男編『源氏物語の世界 方法と構造の諸相』所収、風間書房、2001年9月）という別稿で論じた。



に見ていたのかと問うとき、女性作家の場合とは対照的に、参照すべき資料の少なさに困惑せざるを得ないのである。『土佐日記』のような作品に、追隨する男性作家が現れないくらいだから、それもやむを得ないことかもしれないが、こうした状況にあって、仮名日記に対する同時代の男性の視点を窺うことのできる貴重な資料として注目されるのが、『うつほ物語』（970年代頃）蔵開巻の記述である<sup>13</sup>。

実は、『うつほ物語』の蔵開巻と日記文学の関係については、すでに森田兼吉によって精緻な分析が試みられている<sup>14</sup>。ただし、森田論文でも繰り返言及されるように、「宇津保物語の現存諸本には乱れが多く、（中略）推測による本文批判によって本文の復原を試みながらでなければ、読んで行けない」のが、実情である。当該場面も多くの乱れを内包しており、森田論文は、校訂本文と原本本文を対照しながら、精密な議論を展開しているのだが、本稿では、ひとまず中野幸一校注『うつほ物語』（新編日本古典文学全集、小学館、2001年5月）の校訂本文に拠りつつ、漢文日記と仮名日記の評価に関わる問題点を指摘して、論の閉じめとしたい。

上中下3巻にわたって長大な物語を展開する蔵開巻は、文字通り「蔵を開く」ことをモチーフとして作品世界を始動させている。主人公の仲忠は、母方の祖父俊蔭の旧邸を再建して母に献じようとするが、荒廃した京極の旧邸跡地に「大きにいかめしき蔵」を発見する。蔵の周囲は、「人の屍数知らず」という有様である。近隣の者は、この蔵は近づく者を取り殺すと警告する。まるでルクソールの王家の谷に伝わるファラオの呪いのような話であるが、ともあれ無事に蔵を開けることのできた仲忠は、そこに目録まで完備した宝の山を発見することになる。宝の中心は書籍である。そこには海外の貴重な典籍に混じって、俊蔭や彼の両親の詩集、歌集、日記の類も残されていた。かくて仲忠は、「書どもを見つつ、夜昼学問をしたまふ」という状態で年を送ることになる。やがて、この話題は天聴に達することとなり、朱雀帝や東宮の御前で、仲忠は先祖の遺文を披講する。そして、本稿の視座から興味深いのは、この披講の際、詩集、歌集、日記の類が、特に軽重の区別もなく、興にまかせるようにして読み上げられている点である。

中巻の冒頭で、まず天皇の前で俊蔭の詩集が紹介され、やがて東宮や後の宮を交えて本格的な披講が展開されることになる。そこでもまず俊蔭の集が読まれるが、それを一旦読みさして、続いて披講されるのが俊蔭の母の歌集である。それは大判の4冊の冊子

<sup>13</sup>『うつほ物語』の作者は未詳だが（古来、源順(911年～983年)説あり）、作品内容から推して、男性であることは確実視されている。

<sup>14</sup> 森田兼吉「宇津保物語に描かれた日記文学的作品—日記文学史へのアプローチの一つとして—」（『平安文学研究』第52輯、1974年7月）。



本で、それぞれ平仮名、草仮名、片仮名、葦手で書き分けられている。披講の仕方にも特徴があり、仲忠は漢字を音読するので、「後の宮、いみじう憎みたまふ。されどいよく聞こしめす。異人はえ聞き知らず。聞こしめし知りたる限りは、上も東宮も泣きたまふ」という結果になる。音読まじりの和歌披講ということで、女房たちは聞き取れなかったようだが、天皇も東宮も感動して涙を流している。そして、この一段は、この歌集の内容に関する、「ただありつることを、物語のやうに書き記しつつ、その折の歌どもをつけたり。面白きところも悲しきところもありて」という説明を置くことで結ばれている。この説明は、現代人が「日記文学」という用語から連想する内容と、そのまま重なるものである。中国へ渡った息子との離別の悲しみをモチーフとしてまとめられた『成尋阿闍梨母集』（1073年頃）が、日記文学としての扱いを受けているのと同様に、全く同じモチーフを有する俊蔭母集が、日記と呼ばれたとしても何の不思議もないのである。

俊蔭母集の披講に続いて、再び俊蔭の漢詩文のことが取り上げられ、海外渡航前後のことを中心にまとめられた彼の詩文が紹介されているが、この詩文もまた日記と呼ぶにふさわしい内容を有しているようである。

総じて、これら一連の場面を書き進める作者の筆致からは、漢文学と仮名文学に対する差別や区別の意識は、ほとんど認められない。この場面で問題にされているのは、俊蔭一族の遺文が、どれだけ人の心を動かしただけという点だけであり、それが和文で書かれているか漢文で書かれているかなどということは、全く問題にされないのである。これが、時と場合に応じて漢詩や和歌を自在に詠みこなす、当代の男性文人の言語感覚だったのである。『土佐日記』の出現が反響を呼ばなかった時代とは、だいぶ様子が変わってきたようにも見えるが、それが、『うつほ物語』という途方もない長篇物語を作り上げた作者の、特殊な個性に帰する問題なのか、より普遍性のある傾向なのかという点を明らかにするためには、更に資料を博搜し検証を重ねる必要がある。

(本学教授)